

家持と池主

阿部寛子

一 序

愛のうたと宴席での社交歌とで満ち満ちていた末期万葉の世界——その中の一人にもちろん家持も居た。しかしながら彼は天平勝宝五年のかの絶唱を生ましめた如く、その世界に埋没しきっていた作家ではなかった。

そうした家持にとって天平十八年に訪れた越中赴任のことは、彼の作歌生涯において大きな意義をもつものとされていく。そこでは、病との邂逅があった。しかも池主という友の存在もあった。家持における越中時代が重要視されれば、それだけこれらのことがらとのかかわりあいも考えられねばなるまい。

忽に枉疾に沈み、殆に泉路に臨む。よりて歌詞を作りて、悲緒を申ぶる一首（17三九六二—四）

右は、十九年春二月二十日に、越中国の守の館にし

て、病に臥し悲しび傷みて、聊かに此の歌を作れり。

右により家持の病の事実が知られるが、その際の家持は「掾大伴宿禰池主に贈る悲しびの歌二首」（17三九六五—六）をはじめとした幾多の書簡を、池主との間に交わしている。彼の返書の存することいまでもなく、しかも二人の間で交わされた書簡は、賀古明氏によって「特殊歌風」として捉えられた特異な歌々で形成されたものであり、それは「恋情意表現を親情意表現の手法として転位、転用」したものであるといわれている。即ち、家持と池主との結びつきの深さを語るものこそこれらの歌であろうが、そうした特異な歌風が生れ出づるにはやはり何らかの意味がそこにはあったろう。家持にとってこの池主の存在は如何なる意味をもつものであったのか。右の現象を説明するためにも、この池主とのことは考えられねばなるまい。

二 池主のこと

家持が単身越中国へ赴任したのは、天平十八年六月二十一日のことであったという。その新しい地における家持の下僚こそ、池主であった。彼らの交友は

八月七日の夜、守大伴宿禰家持の館に集ひて宴する歌

(17三九四三―三九五五)

相歡ぶる歌二首 (17三九六〇・一)

右は、八月を以ちて、掾大伴宿禰池主、大帳使に附きて、京師に赴向きて、同じ年十一月に、本任に還り到れり。仍りて詩酒の宴を設け、弾絲飲樂す。…などから窺えるが、官人家持における下僚池主は、果して歌人家持にとって如何なる友であったのだらう。そのことは、こうした社交的場より、病に臥した時に交わされた幾多の書簡にこそ示されている。

「思を非常に騁せ、情有有理に託し、七步章を成し、教篇紙に滿つ」と池主は云う。いうまでもなく家持のことである。こうした言葉が上官への書簡中のもという性質上、どの程度の信憑性を有するかは疑問がある。が、この言こそいみじくも家持の本質をついたものではあるまいか。さらに池主は「巧みに愁人の重患を遣り、能く恋者の積思を除く。山柿の歌泉は此に比ぶれば蔑きが如し」とまで敬仰する。池主にとって山柿以上のものと思われた「思を非常に騁せ、情有有理に託し」という家持の資質は、まさに池主自身と好対

照をみせるものではなかっただらうか。

両者の資質の異同は「布勢の水海に遊覽する」際の賦及び「立山」を詠んだ賦から端的につかみうる。

布勢の水海に遊覽する賦一首 短歌を并せたり

物部の 八十伴の緒の 思ふどち 心遣らむと 馬並めて
うちくちぶりの 白波の 荒磯に寄する 洪谷の
崎徘徊り 松田江の 長浜過ぎて 宇奈比川 清き瀬ご
とに 鵜川立ち か行きかく行き 見つれども そこも
飽かにと 布勢の海に 船浮け据えて 沖へ漕ぎ 辺に
漕ぎ見れば 渚には ち群騒ぎ 島廻には 木末花咲
き 許多も 見の清けきが 玉匣 二上山に 延ふ鶯の
行きは別れず あり通ひ いや毎年に 思ふどち かく
し遊ばむ 今もみること (17三九九一)

布勢の海に沖つ白波あり通ひいや毎年に見つつ賞美はむ
家持 (17三九九二)

布勢の水海に遊覽する賦に敬み和ふる一首 一絶を并

藤波は 咲きて散りにき 卯の花は 今そ盛りと あし
ひきの 山にも野にも 霍公鳥 鳴きし響めば うち靡
く 心もしのに そをしも うら恋しみと 思ふどち
馬うち群れて 携はり 出で立ち見れば 射水川 湊の
洲鳥 朝風ぎに 瀧に求食し 潮満てば 妻呼び交す
羨しきに 見つつ過ぎ行き 洪谿の 荒磯の崎に 沖つ

波 寄せ来る玉藻 片搓りに 纏かづらに作り 妹がため 手に纏かづらき持ちて うらぐはし 布勢の海水に 海人船に 真楫擡た貫くき 白栲あざもの 袖振り反し 率あざもひて わが漕あざもぎ行けば 平布の崎 花散りまがひ 渚あざもには 葦鴨騒あざもきさざれば 立ちても居ても 漕あざもぎ廻り 見れども飽かず 秋さらば 黄葉あざもの時に 春さらば 花の盛りに かもかくも 君がまにま と かくしこそ 見も明らめめ 絶あざもゆる日あらめや

白波の寄せくる玉藻世の間も続きて見に来む清き浜傍を
池主(17三九九四)

この遊覧は「物部の 八十伴の緒の 思ふどち 心遣らむ」ためであったと、家持はまずその動機から説きはじめる。そしてこの布勢の海水にやってきたのも「渋谷の崎」、「松田江の長浜」、「宇奈比川」などの見物では十分満足できなかったからであるという。この海水の風光はわずか「渚には あぢ群騒あぢき 鳥廻あぢには 木末花咲あぢき」で描写され、その美しさも「許多も 見の清けきか」と讃えられるのみである。この海水での遊覧が彼にとって快適なものであったことは「……あり通ひ いや毎年に 思ふどち かくし遊ばむ 今も見るごと」で結ばれていることで明らかだが、この海水の美しさをくどくと叙することを、彼はしない。短歌(三九九二)にも示された如く、毎年賞美したいという自己の主観を示すことで代弁させているのである。美しい風光をそのま

ま歌にすることをしていないのだ。

一方、池主は違ふ。彼はまず端的に「藤波は 咲きて散りにき」「山にも野にも 霍公鳥 鳴あざもきし響あざもめば」と初夏の風光を描く。次いで射水川の「濁あざもに求食あざもして」いる洲鳥達の様子、渋谷の崎で玉藻とたわむれている様子をこまかに叙し、しかも平布の崎の美しい景色を「立ちても居ても 漕あざもぎ廻り 見れども飽かず」と讃える。もちろん池主の場合も「かくしこそ 見も明らめめ 絶あざもゆる日あらめや」で結ばれ、短歌も「続きて見に来む」と、まさに家持に和しているといえる。が、この場合はかくも美しき風光……と叙してきた後では当然の帰結であつたらう。

家持がこの作をなしたのは、四月二十四日であるという。一方池主は二十六日に「追和」したとの左注があることから遊覧の後に作られたものであることはいうまでもない。が、池主はそれらの景色があなたかも眼前に再現している如くことこまかに描きあげてゆく。対して家持は、すべてを一度彼の内部に包含し、主情と共にそれらを歌に化してゆくのである。

立山の賦一首 短歌を并せたり

天離る 鄙あぢに名懸かす 越の中 国内ことごと 山はし
も 繁あぢにあれども 川はしも 多に行けども すめ神の
領あぢき坐す 新川の その立山に 常夏に 雪降り敷きて
帯あぢばせる 片貝川の 清き瀬に 朝夕ごとに 立つ霧の

思ひ過ぎめや あり通ひ いや毎年いねんに 外またのみも 振り
放け見つつ 万代の 語らひ草と いまだ見ぬ 人にも
告げむ 音のみも 名のみも聞きて 羨しぶるがね

(17四〇〇〇)

立山に降り置ける雪を常夏に見れども飽かず神からなら
し

(17四〇〇一)

片貝の川の瀬清く行く水の絶ゆることなくあり通ひ見む

家持 (17四〇〇二)

立山の賦に敬み和ふる一首 二絶を并せたり

朝日さし 背向に見ゆる 神ながら 御名に帯ばせる

白雲の 千重を押し別け 天そそり 高き立山 冬夏と

分くこともなく 白栲に 雪は降り置きて 古ゆ あり

来にければ こごしかも 巖の神さび たまきはる 幾

代経にけむ 立ちて居て 見れども奇し 峰高み 谷を

深みと 落ち激つ 清き河内に 朝去らず 霧立ち渡り

夕されば 雲居棚引き 雲居なす 心もしのに 立つ霧

の 思ひ過ぎず 行く水の 音も清けく 万代に 言ひ

続き行かむ 川し絶えずは

立山に降り置ける雪の常夏に消ずてわたるは神ながらと

そ (17四〇〇四)

落ち激つ片貝川の絶えぬ如今見る人も止まず通はむ

池主 (17四〇〇五)

この立山をめぐる数首のうたにおいても先と同様な両者の
差異が示されている。家持はまずこの立山が「天離る 鄙に
名懸かす 越の中」でも「すめ神の 領き坐す」山であるこ
とからはじめるが、池主は「朝日さし 背向に見ゆる」立
山、「御名に帯ばせる」立山、「白雲の 千重を押し別け 天
そそり 高き」立山、とそのものずばりで筆をおこしてい
る。布勢の海水の場合と全く同様であろう。池主の場合には
さらに「こごしかも 巖の神さび」「峰高み 谷を深みと」
…夕されば 雲居になびき」と、その立山の姿が語られてゆ
く。一方家持の場合、風光そのものをうたったのは「常夏に
雪降り敷きて 帯ばせる 片貝川の 清き瀬に 朝夕ごとに
立つ霧の」のみであり、しかもそれは「思ひ過ぎめや」の序
としてつづいてゆくものでもある。

立山の賦といえば、池主はまずそのきわだった風光を叙す
ことに筆を尽す。が家持はまずその他の比肩すべき山々に思
いを馳せた。さらにはこの山の感動を人に伝えることに心う
ばわれていった。そして遂には「音のみも 名のみも聞きて
羨しぶるがね」とその語り伝える人の心にまで入りこんでゆ
くのである。池主と家持との明らかな違いをここにみるこ
とはできまいか。脳裏に結ばれた像がそのまま歌と化す詩人
と、その像が内的心情と融合しさまざまな展開をみせる詩人
との違いである。

その家持の資質こそ、池主をして「思を非常に騁せ、情を
有理に託し」といわしめたものではなかっただろうか。しか

もそれが池主の掌中にないものであればこそ、又巷の歌人達の中でも異質なものであればこそ、彼の目をみはらせるものであったろう。しかも、そうしたものに敬仰していればこそ「山柿の歌泉は此に比ぶれば蔑きが如し」の言が記されたに違いない。

しかしながら、この言葉はこうした作品が生まれるはるか以前のことである。越中以前にも家持と池主との交友があったことは「橘朝臣奈良麿の集宴」(八一五八一—九一)の際に二人の名がみえることでも知られるが、その交友が深まったのは何といつても越中以來といえるだろう。が、その越中時代の当初にこうした池主の言があることは、彼の家持を理解する目の正しき、深さを語るものと思われる。と同時に、末期万葉の世界の中に埋没しきつていない歌人としての池主の姿をも語るものではあるまいか。

互いに異質なものを有する歌人であったとはいえ、もちろん彼らには共通の場があった。即ち、歌観における一致である。池主は家持の歌こそ「巧みに愁人の重患を遣り、能く恋者の積思を除く」ものであると云う。家持も又「一たび玉藻を見て、稍く鬱結をのぞき、二たび秀句を吟じて、己に愁緒をのぞく」と池主に云う。しかも家持は

春日遅遅にして鶴鷓正に啼く。悽惻の意、歌にあらざるは
撥ひ難し。よりにて此の歌を作り、式ちて締緒を展ぶ。

の有名な言を卷十九の卷末に記している。彼は又

橙橘初めて咲き、霍公鳥翻り嚶く。此の時候に^{むか}対ひて、

詎^なそ志を暢^わべざらむ。因りて三首の短歌を作りて、鬱結の緒を散らさまくのみ。

として三首の歌(三九一一—三)を弟の書持に贈っていた。天平十三年のことである。家持にとつて、歌とはすでに「鬱結の緒」をはらうものであったのだ。

歌が愁緒・鬱結をはらうものとされているということは即ち愁緒・鬱結を宿す人間の存在を語るものであろう。それは自ずと思索の世界を有する人間を偲ばせるものでもある。愛のうた、宴席での社交歌といったもので満ち満ちていた時代であれ、家持には何人によつても犯されえぬ彼だけの世界があった。「固よりは是俗愚にして癖を懐き、黙己をること能はず」という家持は、その彼の世界の中で、歌を詠むことによつてのみ充足した心を保ちえたのだろう。歌うことが即ち彼の安息であつたのだ。

その家持に対し、彼の歌こそ「巧みに愁人の重患を遣り、能く恋者の積思を除く」ものであると、池主は言った。この池主も又家持の如きひとり場の場をもつ歌人であつたかもしれぬ。自らを「愁人」と称し、その「重患」を、その「積思」を除くものこそ家持の歌であると云う。家持の彷徨する詩の世界が、そのまま池主の世界とはなり得なくとも、ここでは家持と次元を等しくする池主の世界があつたのだろう。

中央歌壇から遠ざかった越中の地で家持より先に数年を送つた池主の中には、新しい詩の世界を願う意識の萌芽があつたのかもしれない。上官家持の赴任は、そうした池主にまさ

に新しい目をひらかせたのだろう。池主は家持に惹かれてゆく。「思を非常に騁せ、情有有理に託し……」は、池主にはないものであった。その家持こそ、又その家持の詩の世界こそ、池主にとって山柿以上のものとなっていたのであるまいか。

「山柿の歌泉は此に比ぶれば蔑きが如し」と言ったこの池主は、詩人家持を解しうる、又孤独な家持の世界を解しうる家持の唯一の友だったのである。

三 家持の「恋」

病の中で家持は、この池主を求めた。二月二十九日（17三九六五・六）、三月三日（17三九六九一七二）、三月五日（17三九七六・七）と、詩あり序あり長短歌ありの書簡がやつぎばやに池主に贈られる。しかもそれらには

大君の 任まかのまにまに 科離る 越を治めに 出でて来し
大夫われすら 世間の 常し無ければ うち靡き
床に臥伏し……時の盛りを 徒に 過し遣りつれ 偲はせる
君が心を 愛はしむ 此の夜すがらに 眠も寝ず
に 今日もしめらに 恋ひつつそ居る (17三九六九)
あしひきの山桜花ひと目だに君とし見てば吾恋ひめやも (17三九七〇)

出で立たむ力を無みと籠り居て君に恋ふるに心神こころたまもなし (17三九七二)
葦垣の外にも君が寄り立たし恋ひけれこそば夢に見えけ

れ

の如く、「恋」の語を用いることによって家持の池主への気持が示されているのである。他のものも、「特殊歌風」と呼ばれる如く大夫同志のものとしては奇異な程の香気を放っているが、その特色を鮮明なものにするためにここでは「恋」の語の用いられているもののみを記してみた。

池主も返書の中で、上官の姿のみえぬことを嘆いてわが背子に恋ひすべなかり葦垣の外になげかふ吾し悲しも (17三九七五)

と「恋」の語を用いている。しかしながら、池主の家持に対する心が「恋」の語で示されるのはこの一首のみである。家持の方が常に積極的に「恋」に池主を求める気持を託していた。もちろん、病床にある孤独な家持の方こそが友を求め、池主を求めていたことはきわめて自然なことであったに違いない。しかし、いくら悲しく白い病の床にいるからとて、この「恋」は本来男女間の相聞用語の典型であったはずである。この家持の「恋」の歌々は、果して愛の歌々の流布していた当代和歌の延長上にあるものだったのであるか。

家持には、孤独な歌の世界があった。が、その世界を解してくれる唯一の友池主がいた。家持の「恋」の歌の捧げられた相手こそ、この池主だったのである。その「恋」にはやはり何らかの意味がこめられていたのではあるまいか。

家持の「恋」——その心は一体如何なるものであったのだろうか。相聞の意味のない、家持独自の「恋」がここにもある。

山吹の花を詠む歌一首 短歌を并せたり

うつせみは 恋を繁みと 春設けて 思ひ繁けば 引き
攀ちて 折りも折らずも 見る毎に 情和ぎむと 繁山
の 谷辺に生ふる 山吹を 屋戸に引き植ゑて 朝露に
にはへる花を 見る毎に 思ひは止まず 恋し繁しも

(19四一八五)

山吹を屋戸に植ゑては見るごとに思ひは止まず恋こそ益
れ

(19四一八六)

「うつせみは 恋を繁み」と言う家持。そして山吹をみる
毎に「思ひは止まず恋こそ」ます家持。ここには明瞭な「恋」
の対象はない。しかもこの歌は、京に「留れる女郎」より贈
られた

山吹の花取り持ちてつれもなく離れにし妹を偲ひつるか
も

(19四一八四)

に触発された故のものである。これから推しても、家持の
相聞的恋の対象となりうる大嬢はすでに越中に来ていたた
め、この「恋」はやはり相聞の意味は有していまい。「山吹
の花を詠む歌」とはつきり題詞に記されているものの、山吹
そのものは明確にうたわれていず、「情和ぎむ」と思つて植
えた山吹も、家持をして「思ひは止まず 恋し繁しも」とい
わしめるものだったというのである。

この何ものかへの家持の「恋」は、さらにその翌日うたわ
れた歌にも示されている。

六日、布勢の水海に遊覧して作る歌一首 短歌を并
せたり

思ふどち 大夫の 木の暗の 繁き思ひを 見明め 情
遣らむと 布勢の海に 小船連並め…浜清く 白波騒
き しくしくに 恋は益れど 今日のみ 飽き足らめ
やも…
(19四一八七)

「大夫の繁き思ひ」をはらそうと遊覧した家持も、垂姫の
風景はかえって「恋」を増すものだったという。先の「山吹
の花を詠む歌」でも「思ひ」は止まず「恋し繁しも」とうた
つた家持であった。その彼は又つづけて「繁き思ひ」を「見
明め情遣らむ…」としたが「しくしくに恋は益れど…」
とうたう。ここでは「思ひ」と「恋」とは同義語に用いられ
ているといえる。即ち、ここでの家持の「恋」は彼の茫漠た
る何ものかへのもの思いであるともいえるのである。が、
両者共に「はらそう」とするのが「思ひ」であり逆につ
てくるのが「恋」であるという使いわけは同じである。この
頃、ひとときわこうしたものの思いにとらわれていた家持は、山
吹の花を詠みつつ、又、布勢の水海に遊覧しつつその心をこ
の「恋」で表出しているのである。しかもこれらの歌は両者
共越中時代の末年、即ち天平勝宝二年四月に集中的に詠まれ
たものであった。

思えば、池主との「恋」の歌の存在があつたのは越中時代
スタートの年である。もちろん病の中でのことであつた。そ
して今度は越中時代の最後の一年という時に、右の如き相聞
上の「恋」ではない「恋」の歌々が登場したのである。この
「恋」の歌の偏在こそ、家持の「恋」を解明する鍵となるも

のではなからうか。

「万葉人にとって「恋」とはまさしく「孤悲」であり、それは目の前にない相手を求める心の動きであり、所有欲である(2)という。本来はこうした対人間の、しかも男女間のものであったらうこの「恋」も、家持においては独自の使い方がなされていた。とはいえ、この場合本来の相聞の意味をとり去れば、それはそのまま家持の心情を代表すべき言葉と化したのではあるまいか。

黄泉への道をさまよった数十日——この体験は若き家持にとつてきわめて幸運なことであったかもしれない。かつて憶良も病の中で多くの歌をなした。が、彼は老といひ生活といひ身近な問題がすべて歌と化していった。一方、思索能力の回復と共に家持を訪れたものは、歌そのものの世界のみであった。自ら歌作をなす以上に、先人達の歌の世界の中へ没入していったのだろう。もちろん病の悲哀はそのまま「歌詞を作りて悲緒を申ぶる」として長短歌(17三九六—四)を生んではいらぬ。そして「独り帷幄の裏に臥して」いる彼はその気持を「掾大伴宿禰池主に贈る悲しびの歌」(17三九六五・六)に託して友に贈っている。が、その時の池主の返書こそ家持をしていにしえの和歌の世界にふみ入らしめるものであったのだ。即ち池主は家持の作を「翰苑雲を凌ぐ。兼ねて倭詞を垂れ、詞林錦を舒ぶ」ものとして賞賛する。その詞に導かれて家持の脳裏を占めたものこそ、まさに遠くしかも高き先人達の「遊芸の庭」であり、「山柿の門」であったに違ひ

ない。

越中時代も終る頃、「思ひ」に閉ざされていた家持が、幾多の手段を構じてはらそうとしてもはらいきれず増してゆくものを「恋」で表現したのなら、まさしくこの遠く高い、いにしえの和歌の世界への憧憬こそ、得ようとしても得られぬものを求める心の動きを示す「恋」の語で表わされるべきものではなかったか。あがいても届きえぬこの世界への憧憬こそ、家持の「恋」だったのではなからうか。

新しい詩の自覚と共に、家持の越中時代ははじまった。それは又池主への「恋」と共にあったといつてもよい。しかしながらその越中時代の末年、すでに越前の判官となっていた池主に「水鳥」を贈りつづ

天離る 夷としあれば 彼所此間も 同じ心そ 家離り
年の経ぬれば うつせみは 物思繁し……(19四一八九)
と家持はその心の憂を訴えている。これは天平勝宝二年四月に詠まれたものであり、丁度その期は家持が何ものかへのもの思ひを意味する「恋」のとりこになっていた期と一致する。かつて山柿の世界を願いつつ池主への「恋」の歌々をうみ出した家持は、再びこの池主へ「うつせみは物思繁し」とその心を訴えているのである。

この歌によれば、家持のもの思いとは、辺境の地にあっての幾年かが空しく過ぎ去った故のものと考えられよう。又その空しさとは家持の新しい詩の自覚による越中時代の新しい出発があればこそではなかったか。自ら願ったその和歌の世

界が容易に届きえぬものであれば、しかもその世界への憧憬がより強いものであれば、当然そこには焦躁が生れ出よう。新しい出発から数年を経た今、その世界に至りえぬことを悟った家持を襲うこの焦躁こそ、空しく過ぎてしまった日々——の実感を彼にもらしたものではなかっただろうか。その故にこそ、家持独自の「恋」はかくの如く越中時代の当初と末年とに偏在するのではあるまいか。

辺境の地にあつて、しかも病床にあつて、家持の魂は崇高な詩の世界を求めていった。辿りついたその世界こそ山柿の世界であつたろうが、それは余りに遠くにありすぎた。家持はその世界に憧憬する。しかもそれが隔絶された世界であればある程その憧憬はつのつてゆく。そうした中で、彼の願う詩の世界の範疇に入りうる友を、家持は得た。末期万葉の世界からの離脱を願ひ、崇高な詩の世界を求めて彷徨する家持の心は、この詩友池主によつて支えられていたのだから。「山柿の歌泉は此に比ぶれば蔑きが如し」と言つた池主も決して山柿の世界を否定していたわけではあるまい。むしろその世界を認めていればこそ、敬仰する家持をそれ以上のものでしたのだから。彼のこの言は、はからずも家持の未来の姿を予言したことになつたともいえようが、そうした詩の世界を透視する確固たる目をもつこの池主こそ、家持の「恋」を捧げるべき友となりえたのではあるまいか。

それから数年、家持の精進は続けられる。その彼にも心の坐折がやってきた。越中時代の末年に彼に起つた自省の念は

己れをもの思いの中に閉ざしてしまふ。空しく過ぎ去つた日々への回想が彼をとりこにしたのだから。そして再び、いしえの和歌の世界への強い憧憬の念が頭をもたげてきたのだろう。それを彼は「恋」の語に託していた。その彼は又、新しい出発を共にしたかつての最良の詩友に、自らの心の断片を語りかけたくなつたのだ。彼の心を解してくれた唯一の友池主に、家持は云う、「うつせみは 物思繁し」と——

家持の池主を求める姿は、かの病の期において顕著に示されたこというまでもない。しかしながらそれが決して病の故の一时的感傷に基づくものでないことは、その数カ月後税帳使として都に赴くことになつた際にも示される。もちろん家持のために餞宴が設けられもした（17三九九五―七・三九九九）。が、そうした社交的場からではなく、「京に入らむとき漸く近づき、悲情撥き難く、懷を述ぶる一首」（17四〇〇六・七）「忽に京に入らむとして懷を述ぶる作を見る。生別の悲しびの、腸を断つこと万廻なり。怨緒禁め難し。聊かに所心を奉る一首」（17四〇〇八―一〇）という池主との贈答歌の存することからこそ、家持のその姿は偲ばれる。久方ぶりに都の土を踏むことのよろこび以上に池主との別れが「心し痛し」という家持である。こうした歌が社交上の意味しかもたないものであつたなら、それは当然上官へのはなむけとして、まず池主の側から贈られるべきものであつたらう。が、まず友とのいささかの離別を嘆いたのは、家持であつた。しかもいくたびかの餞宴以外に、この池主とだけの世界を自ら

作っているのである。歌を詠むことに安息を求めていた家持にとつて、池主の存在はもはやそれと同等の位置にあったのかもしれない。歌と池主とは、家持にとつて不可欠の存在であったのだ。

かくも池主を求めた家持——その心中には「かき数ふ 二上山に 神さびて 立てる 榎の木 幹も枝も 同じ常磐に 愛しきよし わが背の君を……」(17四〇〇六)とある以上、辺境における唯一の同族という結縁的意識があつたことも否定できない。が、歌によつてのみ充足の場の得られた家持にとつて何よりも心の糧となつたのは、やはり詩人としての池主の姿であつたらう。しかも歌が家持の生命のすべてであつたなら、その友はやはり詩を解する友でなければならなかつたらう。官人家持にとつての下僚池主は、まさに鋭敏な洞察力にめぐまれ、しかも当代和歌のうしおに流されえぬ高き詩の世界を有している歌人でもあつたのだ。

いにしえの和歌の世界への憧憬を「恋」の語に託した家持は、この詩人池主にこそ「恋」の歌を捧げたのである。

四 結 び

「死の淵より」立ちかえつた家持には詩の世界での新しい出発が待っていた。が、その広大な世界をひとり彷徨するにはあまりに繊細でありすぎた。そのひよわな詩人を支えた友こそ、この池主であつたらう。

病床にあつて、永遠の生命を宿すいにしえの和歌の世界へ

心をよせる家持は、その心を解しうる友を求めてさまよつていたのであろうか。池主との出会いがそこにあつた。そこで「恋」は、むろん当代の相聞の世界の延長上にあるものではあるまい。家持の「恋」には、高き詩の世界へ憧憬する家持によつて、新しい生命が与えられていたのである。

そうした「恋」が池主の頭上へ捧げられたのも、家持の願う詩の世界と同じ程に詩人池主の存在が必要とされたためであつたらう。家持を山柿以上のものと断ずるこの池主には、彼と次元を等しくする孤独な詩の世界があつたのだ。池主は詩人家持を敬仰する。家持はこの池主を「恋」う。この二人の結びつきをもたらしたのもこそ、末期万葉からの離脱を願う、又永遠の詩の世界に憧憬する、詩人の心であつたらう。

越中における家持と池主との出会いはわずか一年余にすぎなかつた。とはいえ、新しい詩の自覚と共にほじまつたその新しい時代の中で、この新しい友の存在こそ、彷徨の詩人家持にとつて孤独な詩の城塞を築く上の不可欠のものであつたに違いない。

注(1) 「万葉集新論」三五九頁

(2) 伊藤博氏「万葉集相聞の世界」五八頁—七一頁

尚、万葉集の引用は日本古典文学大系(岩波書店)本による。